

日文研の知平線

異なる文化が接触したとき、両者が滑らかに溶け合うことは稀だ。反発し、摩擦が起き、火花が散る。「その境界線に立ち、なぜ軋轢が起こり、そこから何が生まれたのかを観察したい」と国際日本文化研究センターの稲賀繁美教授は話す。

芸術におけるモダニズムの成立過程が研究の主テーマ。その対象は、東洋の異国情緒に魅せられた西欧のオリエンタリズム、ジャポニズムから近代日本美術、異文化コミュニケーション論と変わって、「異なる価値観のずれ」に目を凝らす姿勢は一貫する。昨年、編著で刊行した「伝統工芸再考―京のうちそと」では、手仕事によるものづく

文化摩擦の現場

稲賀繁美教授

いなが・しげみ 東京大大学院、パリ第7大博士課程修了。三重大助教授を経て1997年に日文研助教授、2004年から教授。サントリー学芸賞、和辻哲郎文化賞など受賞。編著に「異文化理解の倫理にむけて」など。



「興味があるのは文化の気象学。気圧の差が、前線で雨や風を生む。そこに目を向けると全体のメカニズムが分かるのは文化も同じ」と話す稲賀繁美教授（京都市下京区）

異なる価値観のずれ 見つめて全体を知る

り文化に焦点を当てた。そこでは、「工芸」というジャンルの誕生と変容の軌跡を多角的に検証し、今日につながる日本の造形の問題点を浮き彫りにした。

「西洋では産業革命以降、それまで一体だったアルスマ術」とテクネ技術が分離した。その考え方が明治の近代化で輸入され、伝統的ものづくりのうち、美術からも産業からも疎外されたものを工芸

と呼んだが結果として職業連関の鎖が断たれた面もある」

伝統工芸が置かれた苦境を冷静に見つめつつ、デジタル化社会における人間の「手わざ」に可能性も見いだした。

「パソコンのキーボードや携帯電話のボタンを叩けば、世界が操作できる。そんな幻想が若い頭脳を侵しつつある。だが一方で、ナノテクノロジーの世界に昔の職人芸が

生きていた、という事例もある。デジタルとは本来、ラテン語で指をさす言葉。手がさまさまなものに触れて得る感覚や、十指でものに命を吹き込む営みは、行き詰まった現代社会に一つの方向性を示唆している」

異なる思想や文化が交錯する「潮目」に注目する契機となったのは、一九八六年のパリ滞時に見た日本の前衛美術展。そこでは西洋が規定し

た「アバンギャルドなアート」が並び、日本画や俳諧など伝統的なジャンルにおける先鋭的な創作は無視された。

「視点が異なるのは当然だが、日本側にも西洋が求めるイメージに乗じる思惑が透けてみえた。そこに至る政治的な力関係やイメージを作る過程に興味を持った」

近代世界を支配した価値観の根っこを確かめようと、一九九七年に著した「絵画の黄昏」では、近代絵画の父マネがいかんにして大物になったのか舞台裏を検証し、通説を覆した。安藤広重やゴッホ、ローランを論じた「絵画の東方」では、ヨーロッパ発の透視図法が、江戸の絵師によって借景の技法に変質され、西欧にインパクトを与えたと指摘。東西文化の錯綜した関係に新たな視点を投げた。

「揺るぎないように映る評価も、実はどこかで操作されている。一つのテリトリーに縛られていては全体像は見えてこない」



北アフリカでの戦いを描いたオラースウェルズ作「アフリカ大陸の移動陣地の奪取」部分。絵、歴史的大作だったが植民地政策の肯定を理由に現在は非公開。稲賀繁美教授著「絵画の東方」表紙から

■ジャポニズム

19世紀後半、日本の美術や工芸が西欧の芸術に与えた影響を指す。特に印象派への浮世絵の影響が有名。エキゾチックな画題、独特の彩色、凝った装飾性、非対象の構図、自由な視点といった特性が、新しい表現に飢えていた芸術家を魅了し、ルネサンス期に構築された西欧中心の世界観を揺さぶった。

一方、同時代の日本美術界では「ジャポニズムはゆがんだ視点」との見方も強く、広重や葛飾北斎への評価も低かった。欧州に留学した画家たちが旧来の美術を否定し、新しい絵画を生み出す動きにつながった。

四月には「東洋的思想・美術の洗い直し」をテーマにした共同研究を立ち上げた。鈴木大拙による禅思想の紹介など、宗教や文学、政治の領域からも考察し、東洋人による自己像と西洋から見たイメージを比較、分析する。その形成過程から、ステレオタイプな表象がいかにして固定されたのかを解明する試みだ。

「受け入れやすい異質性だけでなく、理解しがたい他者の違いも認めること。それなしに、真の東西的対話は深まらない。相互理解という言葉は麗しいが、摩擦の中にこそ現実がある」

(文化報道部 道又隆弘)